シリーズ
成田市
50年

⑬長谷川市政から小川市政へ
（平成6～15年）

市民を大切にする市政を目指して

―日本一住みよいふるさと成田の実現に向け―

平成7年5月、6期24年にわたる長谷川録太郎成田市長に代わり、小川国彦氏が第四代目の成田市長に就任しました。

成田空港問題の完全解決、福祉や医療・教育・環境行政の充実、市民の税負担の軽減、清潔な市政の展開など、市民生活に直結する政策を掲げて小川市政がスタートしました。

平成12年度内に平行滑走路の完成を目標とした成田国際空港
（写真は平成7年8月撮影）

成田空港問題

小川市政においても最重要課題の筆頭に挙げられた空港問題。

円卓会議で問題解決のための道筋はつけられたものの、空港と地域との共生を図るためには、騒音対策、周辺の地域振興、効率的な土地利用および平行滑走路の建設など難問が山積していました。

そこで市では、平成7年10月に空港関連施策の取り組みを強化するため空港対策部の新設や、民家防音工事再助成などの実施に踏み切りました。

一方、用地内の地権者が移転に同意し、空港問題の解決に向け大きく前進した年でもありました。

ホームヘルパー養成講座の開催

福祉の充実の第一歩として、これからの福祉社会の担い手であるホームヘルパーを養成しようと平成7年6月、市が呼びかけたホームヘルパー養成研修講座。何と定員の倍以上の応募があり、応募者の関心の高さと熱意に応えるべく全員の受け入れを決定。4カ月間にわたる講義と実習を終え、61人がホームヘルパーの資格を得ました。

メモをとりながら熱心に聞く受講生（平成7年6月）

介護保険の平成12年度実施に向けて優先して取り組んだ事業で、これまで2・3級合わせて304人の資格取得者を育成し、福祉施設などで活躍しています。

ポイ捨て禁止条例の制定 リサイクルプラザがオープン

日本の空の表玄関として、伝統ある門前町でもある「ふるさと成田」からごみを一掃しようと、平成9年4月、ポイ捨て禁止条例を制定。6月には、ごみの減量とリサイクルをテーマに、第1回成田市ごみフォーラムを開催。翌年にはごみの分別収集方法が5分別から6分別に、ペットボトルの回収も始まりました。

平成10年4月、ごみの再資源化の拠点として、いずみ清掃工場の隣に成田リサイクルプラザが完成。市をあげて日本一住みよい美しい成田を目指すとともに、市民のリサイクル活動に対する意識も大きく向上しました。

再生棟・処理棟・貯留棟の3つの建物からなるリサイクルプラザ

表参道整備事業

商家を営む人々の50年来の願いがかなう

土蔵造りの商家、木造大型旅館や中食屋と呼ばれる飲食店が軒を連ねる門前の街並み。伝統ある街並みを保存しようと計画されたのが、上町地区のセットバック（参道沿いの建物の後退）と仲町地区の電線地中化事業でした。

車社会が進み、表参道の参詣（けい）客が減り、これを打開するために平成2年「仲町まちづくり協議会」が設立されました。

昔からの街並みの保存するために、①電柱を撤去し、電線を地中に埋める、②街路灯を撤去し、足もとを照らす行灯（あんどん）型照明を付ける、③電飾看板を無くすなどの景観協定を定め、平成13年6月電線地中化が完成。

この年、7月8日に最も近い金曜日から日曜日に開催日が変更となった成田祇園祭。7月6日、電線地中化の完成を祝うテープカットが行われ、新しくなった街並みが披露されました。

電柱と電線、ゲートがなくなった仲町の坂。新勝寺の屋根が見通せるようになった

平成13年6月25日の深夜、9本の電柱が撤去された（長谷川一治氏所蔵）

図説成田の歴史の刊行

目で見て楽しめる ふるさと成田の歴史

カラー写真やイラストが多彩に（平成7年4月）

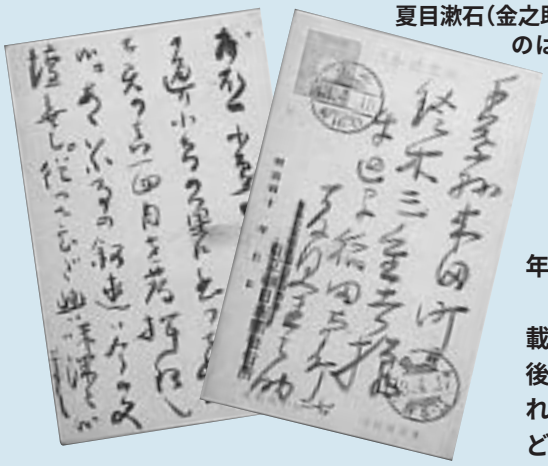
昭和45年、成田市史編さん事業がスタートし、これまでの「成田市史」の通史編・資料編・市史年表などの成果を踏まえ、さらに新資料を加えてカラー図版で成田の歴史を紹介した本。市民の誰もが、読みやすく、親しみやすい本です。新資料の撮影やイラストの掲載にも細かな配慮がなされ、古代から現代までの成田の移り変わりがこの一冊で手に取るように分かります。

人頭形土製品・ムササビ形埴輪

国内初の出土品に大勢のファン

豊住工業団地に隣接するゴルフ場の発掘調査で、南羽鳥中岫（なかのごき）第1遺跡から5,500年前の人頭形土製品が、正福寺（しょうふくじ）遺跡第1地点第1号古墳（6世紀中ごろ）からムササビ形埴輪が出土しました。過去に類例がない出土品に、新聞やテレビで大きく取り上げられ、市役所や地元での公開や説明会では、一目見ようと大勢の市民が駆けつけました。

上：ムササビ形埴輪（平成6年8月）、左：平成15年に重要文化財となった人頭形土製品（県立房総のむら風土記の丘資料館に展示）



夏目漱石（金之助）から三重吉あてのはがき（明治43年、市立図書館所蔵）

童話作家・鈴木三重吉

自筆原稿や遺品など成田市に

児童文学者で、童話雑誌『赤い鳥』の創刊者鈴木三重吉は、明治41年10月から2年8カ月、成田中（現成田高校）の教頭として赴任。

この成田時代は、彼の代表作のひとつ『小鳥の巣』を国民新聞に連載し、小説家としての地位を築いた時期でした。成田を去り80数年後の平成9年6月、成田山公園に文学碑が建立されることになり、これがきっかけとなり、遺族が自筆原稿や初版本、成田時代の写真などを市に寄贈しました。